

東海 の 古 代

第212号 2018年4月

会長 : 竹内 強 副会長・発行 : 林 伸禧
編集 : 石田敬一 投稿先アドレス : furutashigaku_tokai@yahoo.co.jp
HP : http://www.geocities.co.jp/furutashigaku_tokai

倭国と天国^{あまつくに}

一宮市 竹島正雄

1. はじめに

「東海の古代」第203号(2017年7月)で天国の所在地を対馬島とし、「同」第205号(同年9月)でこの対馬島を南方の海洋族が辿り着いた所である「礮馭慮島」であるとした。また、この時「倭国」の範囲を対馬・壱岐及び北部九州としたが、『後漢書』韓伝、『魏志』韓伝に半島の南端に「倭国」があったと伝えている。この倭国と北部九州の倭国の関連を考えてみた。参考資料として、インターネットにある『後漢書』韓伝、『魏志』韓伝及び岩波文庫の『中国正史日本伝(1)』を使用した。

2. 『魏志』韓伝の倭国の紹介

(1) 韓伝

韓在帶方之南 東西以海為限 南與倭接 方可四千里。有三種 一曰馬韓 二曰辰韓 三曰弁韓。辰韓者古之辰國也。

韓は帶方郡の南に在り、東西は海を以って限りとし、南は倭と接し、方(の一辺)は四千里ばかりである。三種あり、一つ目は馬韓と言ひ、二つ目は辰韓と言ひ、三つ目は弁韓と言ふ。辰韓は古の辰國である。

(2) 馬韓伝(関連部抜粋)

馬韓在西。其民土着 種植 知蠶桑 作絺布。

馬韓は西に在る。その民は土着し、種を植え、養蚕を知っており、綿布を作る。

侯淮既僭號稱王 為燕亡人衛滿所攻奪 將其左右宮人走入海 居韓地自號韓王。其後絶滅 今韓人猶有奉其祭祀者 漢時屬樂浪郡四時朝謁

朝鮮侯箕準は臣下でありながら身分を越えて王と称していたが、(BC194に)燕の亡命人の衛滿が攻撃し奪う所となり、その左右の宮廷人と海に走り入り、韓地に居住して自ら韓王と号した。其の後絶滅したが、今の韓人で、なおその祭祀を奉じる者がいる。漢の時は樂浪郡に属し、四時季節毎に朝謁していた。

建安中 公孫康分屯有縣以南荒地 為帶方郡。…(略)…。是後倭韓遂屬帶方。

建安年間(の建安9(204)年に)公孫康が屯有縣以南の荒地を分けて、帶方郡とした。…(略)…。この後、倭と韓は遂に帶方郡に属した。

景初中 明帝密遣帶方太守劉昕 樂浪太守鮮于嗣 越海定二郡

景初年間(の景初2(238)年3月末までに)明帝は密かに帶方太守・劉昕と樂浪太守・鮮于嗣を遣わして、海を越えて二郡を定めた。

時太守弓遵樂浪太守劉茂興兵伐之 遵戰死 二郡遂滅韓

時の(帶方郡)太守・弓遵と樂浪太守・劉茂は兵を興して之(三韓)を伐った。弓遵は戦死したが、二郡は遂に韓を滅ぼした。(正始7(246)年5月の事)

以五月下種訖祭鬼神。郡聚歌舞飲酒晝夜無休。其舞數十人俱起 相隨踏地 低昂手足相應 節奏有似鐸舞。 十月農功畢 亦復如之。

5月中に種まきが訖ると鬼神を祭る。郡聚は歌舞飲酒をして昼夜休まない。その舞は、数十人が俱に起き、互いに随い地を踏み、手足を上げ下げして互いに応える。節奏があり鐸舞に似ている。十月に農作が畢ると、亦之らの如きことを繰り返す。

(3)辰韓伝(関連部抜粹)

辰韓在馬韓之東。其耆老傳世自言 古之亡人避秦役 來適韓国 馬韓割其東界地與之。

辰韓は馬韓の東に在る。その年老いた老人が世に伝えて自ら言うに、いにしへの亡命人が秦の労役を避け、韓国にまっすぐに来た。馬韓はその東の領域地を割いて、之を与えた。と

有城柵。其言語不與馬韓同。…(略)…。有似秦人 非但燕齊之名物也。名樂浪人為阿殘 …(略)… 謂樂浪人本其殘余人。今有名之為秦韓者

城柵を有する。其言語は馬韓と同じでない。…(略)…。秦人に似たところがある。但し燕や齊の名や物ではない。樂浪人を名付けて阿殘とする。…(略)…。樂浪人は、本はその(辰韓人たちの)うちで、(樂浪に)残った人だと謂う。今、この辰韓の名を秦韓とする者が有る。

國出鐵 韓濊倭皆從取之。

国には鉄が出る。韓、濊、倭の皆が従ってこれを取っている。

男女近倭亦文。便歩戰兵仗與馬韓同。其俗行者相逢皆住讓路。

男女は倭に近く、亦入れ墨している。すなわち歩いて戦い兵器は馬韓と同じ。その風俗は、道を行く者が相逢うと、皆立ち止まり路を譲る。

(4)弁辰伝(関連部抜粹)

弁辰與辰韓雜居。亦有城郭。衣服居處與辰韓同 言語法俗相似。祠祭鬼神有異。施竈皆在戸西

弁辰は辰韓と雜居している。また、城郭を有する。衣服や居所は辰韓と同じで、言語や法俗も相似している。祠祭する鬼神には異なりがある。竈を施工するに皆戸内の西に在る。

其瀆盧国與倭接界。十二國亦有王。其人形皆大 衣服潔清長髮。亦作廣幅細布 法俗特嚴峻。

その瀆盧国は倭と界を接している。十二国に、また王を有する。その人々の形は皆大きく、衣服は清潔で、長髪である。また広幅の細かい布を作る。法俗は特に厳しくおごそかである。

3. 『後漢書』韓伝の倭国の紹介

韓有三種一曰馬韓二曰辰韓三曰弁辰。馬韓在西有五十四國 其北與樂浪 南與倭接。辰韓在東十有二國 其北與濊貊接。弁辰在辰韓之南 亦十有二國 其南亦與倭接。

韓は三種有り、一つ目は馬韓と言ひ、二つ目は辰韓と言ひ、三つ目は弁辰と言ふ。馬韓は西に在り、五十四国を有し、その北は樂浪と、南は倭と接する。辰韓は東に在り、十二国で、その北は濊貊と接する。弁辰は辰韓の南に在り、また十二国で、その南はまた倭と接する。

地合方四千餘里 東西以海為限。皆古之辰國也。

土地は合わせて方四千余里であり、東西は海を以て限りとしている。皆、昔の辰國である。

其南界近倭 亦有文身者

その(馬韓の)南の界は倭に近いので、身体に入れ墨をしている者がいる。

辰韓耆老自言 秦之亡人避苦役 來適韓國 馬韓割東界地 與之。

辰韓の古老が自ら言うには「秦からの亡命人が苦役を避けて、韓国にまっすぐに来た時、馬韓は東の領域地を割いて、これに与えた。」

國出鐵 濊倭馬韓並從。市之凡諸貨易 皆以鐵為貨。

(辰韓)国は鉄を出す。濊、倭、馬韓はそろって従う。市の多くの品物が交易されるに、皆が鉄を貨幣としている。

弁辰與辰韓雜居。城郭衣服皆同 言語風俗有異。其人形皆長大 美髮衣服潔清。而刑法嚴峻。其國近倭 故頗有文身者。

弁辰と辰韓は雜居している。城郭や衣服はみな同じだが、言語や風俗には異なりが有る。弁辰の人々は皆背が高く、美髪で衣服は清潔である。しかし、刑法は厳しくおごそかである。その国は倭に近いため、身体に入れ墨をする者がすこぶる多くいる。

4. 半島の倭国と北部九州の倭国

(1) 半島の倭国の位置

半島の倭国の位置を魏志韓伝から推測する。前述のように、後漢書韓伝の内容は魏志韓伝の要約であることが分かる。因って、魏志韓伝から推測する。

- ① 韓は馬韓、辰韓、弁辰の三種からなり、合わせて一辺が約四千里の方形をしている。その方形の南で倭と接している。
- ② 馬韓は方形の西側にある。また、辰韓は方形の東側にあり、弁辰は辰韓と雜居しているとある。つまり、辰韓と弁辰は方形の東側で混在しているのである。

③その弁辰に属する瀆盧国が方形東側の南端にあり、その南側で倭と接している。

以上から、半島の倭国は今の慶尚南道の海岸線に位置していたと推測できる。ここは対馬島の北側に対峙する位置であり、魏志倭人伝が紹介している狗邪韓国のある所である。

(2) 半島の倭国の風俗

半島の倭国の風俗の一つに身体に入れ墨を施していたことである。これは辰韓伝の中に「男女は倭に近く、また、入れ墨をしている。」とあることから分かる。この「倭に近い」とは地理的にはではなく、民族的である。

(3) 北部九州の倭国との比較

対馬、壱岐を含む北部九州の倭国の風俗を魏志倭人伝は次のように伝えている。

- ①対馬国…良田なく、海物を食して自活している。
- ②末盧国…好んで魚鮓を捕え、水深浅となく、皆沈没してこれを取る。
- ③全 般…男子は大小となく、皆黥面文身す。…(略)…。今倭の水人、好んで沈没して魚蛤を捕え、文身し、また以て大魚・水禽に厭いとわせる。

以上のように「今の倭」、即ち3世紀前葉の北部九州の沿岸の倭人は黥面文身して海に潜っていると伝えている。また、文身する理由を「夏后少康の子、会稽に封ぜられ、断髪文身、以て蛟龍の害を避く。」としている。これに対し、梁書は「倭者は太白の後裔であると自ら云う。俗人は皆文身する。」と伝える。太白とは中国周王朝の長男であるが、次男の虞仲と共に江南の地に行き、呉(句呉)国を興した人で、この江南の地が少康の子が封ぜられた会稽である。この呉がBC473に越に滅ぼされた時、呉人の多くが倭に逃れ来たとされている。この倭は北部九州だけでなく対馬海峡を挟んだ半島南岸の地にも及んだと考える。また、BC333に越が楚に滅ぼされた後も呉人は江南に残ったが、BC221に秦が中国全土を支配した時、万里の長城の建設の為に連れ去られた。この労役から逃れ来たのが辰韓の人たちである。この様子を辰韓伝は「其耆老傳世自言 古之亡人 避秦役來適韓国」としている。つまり、辰韓人が文身しているのも、倭人が文身するのも、夏后少康の子が会稽郡に封ぜられて以来の江南の地の人たちを同一の祖とするからである。

5. まとめ

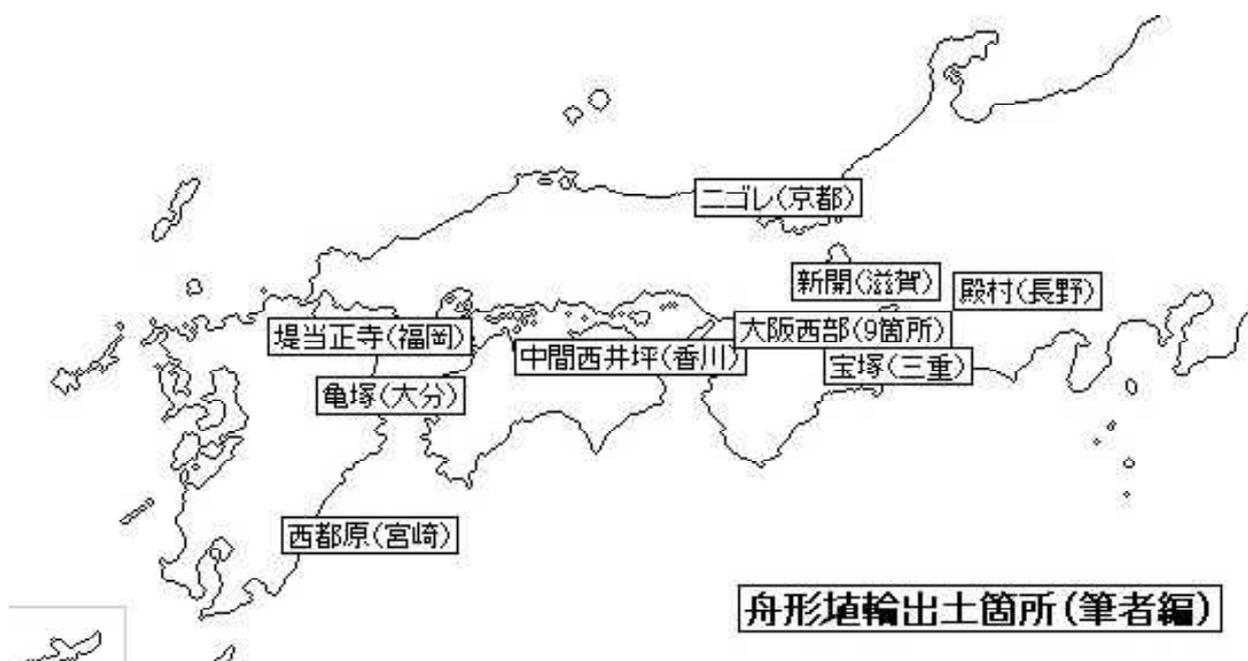
以上のように、半島南東部沿岸にも倭国があった。その地域の人々も、北部九州玄海灘沿岸の人々と同じく文身していた。そして、両地域の人々が住み着いたのは、『日本書紀』の神話が始まった紀元前5世紀の事である。その後、紀元前3世紀後葉に秦が中国全土を支配したころから半島に逃れ来る人々が増えた。その中の辰韓国グループに属した国に文身を行っている国があった。この国は玄海灘沿岸地域の人々と祖を同じにする人々であった。つまり、神話に登場する「天国」は半島南岸をも含んでいたと考える。辰韓国を構成する十二国の内の斯盧国が全体を支配し新羅国になった。書紀神話の第八段一書第四に追放された素戔鳴尊が子の五十猛神を連れて新羅国に降り到了、とある。これも「天国」が半島に及んでいた事を伝えていると考える。

船形埴輪と海洋交易

一宮市 畑田 寿一

死後においても生前と同じ生活ができるように、生前に使っていた道具を陶器で製作したものを中国では「明器」と呼び、墳墓に副葬する習慣は紀元前から行われていた。

海洋民族がその生活の糧である船を副葬した船形埴輪は全国で30個程発掘されている。今回は、船形埴輪が出土した各地の遺跡を通して5世紀から6世紀の倭国の海洋交易を眺めてみたい。



1 西都原遺跡（宮崎県）

（1） 西都原遺跡の概要

西都原遺跡は南九州を代表する遺跡で、古墳群は4世紀初頭から5世紀前半に亘り構築され約320基を数える。最盛期は5世紀初頭で「男狭穂塚古墳」と「女狭穂塚古墳」（墳長176m）が造られた後は大隈半島の横瀬古墳（5世紀中頃）に主役の座を譲ることになる。5世紀初頭は大和朝廷では応神天皇・仁徳天皇期にあたり、南九州は南洋貿易の玄関口としての役割を果たしていた。

（2） 船形埴輪

出土した船形埴輪（全長100cm）は丸木船の上に波除けの舷側板を取り付けた準構造船で12本の櫂を固定するピポットを備えている。用途は死者の魂を送る乗り物をとする説が多いが、非常に写実的な描写が多く、実際の船をモデルとしたものと考えの方が妥当である。櫓の部分をもとに1m間隔とすると全長は15m程になり、外洋を航行可能であった。

(3) 鞍形家屋埴輪

鞍形家屋埴輪は母屋の四方に付属家が接続された形をしており、「子持ち家屋」と称されている。船形埴輪と同様に生前の生活を死後にも不自由なく行うことを目的としていたと考えられる。なお、家の形状は明らかに東南アジアの特徴を示しており、南方からの渡来人が元祖であること暗示している。



< 西都原古墳群（新泉社）より >

(4) 男・女狭穂塚古墳の被葬者

発掘当初は神代の遺跡を期待していたが5世紀初頭の古墳であることが判明し、男狭穂塚古墳は「諸県君牛諸井」に、女狭穂塚古墳は「日向髪長媛」(諸県君牛諸井の女)とする説が有力である。この説に従えば神功皇后の熊襲征伐も史実を持つことになるが、征服された方が妃を出すことは考え難いので、南九州に複数の勢力が存在し、神功皇后が諸県君の反対勢力を討伐した結果、大和朝廷との関係が生まれたと見るのが妥当であろう。

大和朝廷の関係が生まれた結果、奄美諸島などからのヤコウ貝、タカラ貝などの輸入ルートが開かれ、この地に繁栄をもたらしたと思われる。

2 亀塚古墳（大分県）

別府湾沿いの南側にあり5世紀初めの構築である。船形埴輪は無いが、円筒埴輪に南海産のスイジ貝の文様や船を思わせる線刻が施されている。被葬者は海部王とされており、海洋氏族の影が濃い。

この地は南洋貿易の中継点にあたり、瀬戸内海ルートの繁栄に併せて栄えたと考えられる。

3 難波地方

大阪湾の難波地区には船形埴輪を出土する遺跡が集中する。確認できているだけでも9箇所におよび、全体の1/3にあたる。この地は百済系の渡来人が多く朝鮮製の陶器など多数出土し百済寺跡もある。在来氏族は葛城・平群の勢力が強く、彼らを中心とした政治が行われていた。遺跡の主なものを挙げると次のものがある。

(1) 長原高廻り古墳（大阪市平野区）

長原高廻り古墳からは128cmの船形埴輪が出土している。他の寸法を参考にすると、実物は全長15m、幅3mで20～30トンの船と想定され、数十人を乗せて外洋を航行できるものであったと考えられている。付近の古墳からは馬の埴輪も出土しており「河内馬飼首」の地とは少しはなれているが、馬も飼育していた。また、古墳は長原古墳群に属しており、微高地であったため、5世紀当初から繁栄した。しかし度々の洪水に耐えかねて6世紀には引っ越しを余儀なくされたと思われる形跡がある。

(2) 皿池古墳（東大阪市）

船形埴輪の他に韓式系土器、渤海三彩陶など出土している。この地は河内直の菩提寺の河内寺院跡の近くにあり、海外との幅広い交易を行っていたことが覗かれる。

(3) 岡古墳（藤井寺市）

古墳は33m程度の小さな古墳であるが、出土した船形埴輪は、長さ150m、幅30cm、高さ45cmで日本最大である。この地は岡ミサンザイ古墳の陪塚と考えられていたが現在では独立の古墳であるとされている。構築は4世紀末で葛城氏が河内で勢力を増していた時代であり、九州の西都原遺跡との関係も覗かれる。

4 琵琶湖周辺

琵琶湖は日本海からの物資の輸送路であった。5世紀には大和へのルート他に尾張、美濃を經由して東国へのルートも開発されていた。

(1) 大塚山古墳（滋賀県野州市）

琵琶湖の東側の高台にあり、大岩山古墳群に属している。船形埴輪以外に鶏（80cm）や水鳥の埴輪を出土しており、琵琶湖の水運を担当していたことが覗かれる。

(2) 新開4号墳（滋賀県栗東市）

琵琶湖の東南側にあり、大塚山古墳とともに琵琶湖の水運を把握していた地方の豪族の墳墓と思われる。船形埴輪（115cm）は精巧に表現されており、当時の準構造船を知る上で貴重な史料となっている。

5 その他の地域

(1) 宝塚1号墳（三重県松阪市）

宝塚古墳は、5世紀前半の構築で、日本最大級の船形埴輪（140cm）を出土している。場所的に大和への東の入り口に当たるとともに出土品から王権が存在することが覗かれ、伊勢王国説を唱える研究者もいる。この地は安曇氏に繋がる度会氏の本貫地であり海洋族であった。早くから大和王朝との関係が深く、大和王朝の東進に重要な役割を果たしてきた。紀伊半島を經由して伊勢湾を渡り東海に通じるルートは荒尾南遺跡（大垣市）などから4世紀には開かれていたと思われるが、この地は中継地としての機能も果たしていた。

(2) 殿村遺跡（長野県飯田市）

船形埴輪と船を漕ぐ人物像が出土している。海洋族の内陸への進出説に加えて天竜川の水運を担当していたとする説がある。

そのほか、船形埴輪は出土していないが長野県松本市の北西に位置する安曇野市は安曇氏が定住した場所として知られており、海洋族の内陸への進出を物語っている。

6 須恵器の伝播

通説では、5世紀前半に朝鮮半島から伝えられた須恵器の製造技術が難波の南（堺市）の「陶邑」^{すえむら}で花咲き、その技術が全国に広まったとされていたが、その後の発掘の結果、九州、瀬戸内海でも同じ時期に製造がされてきたことが判明してきた。しかし、なぜ難波が最大の生産地になったかについては明確な説明はされていない。前述のように難波が当時日本の交通の要所であったことを考えると、交易品の1つとして発展した可能性は高い。

7 まとめ

(1) 海洋貿易繁栄の背景

この時代、古墳を造る専門集団がいた。彼らは日本各地の豪族のために古墳の設計から施工に至るまでを纏めて請負い、場合によっては石棺、埴輪、副葬品の手配を行っていた。仮にこの集団を「古墳ゼネコン」と呼ぶとすると、古墳ゼネコンの指示に従い石棺工房や埴輪工房から資材を輸送する集団が必要である。ピンク石の石棺を遠く九州から近畿まで運んだ事例もある。仁徳天皇陵の構築費用を試算した大林組に拠ると陵墓の構築人工数で最も大きいのは資材の輸送人工数であり、建設要員の確保には食料を含めた生活物資の輸送が不可欠である。古墳建築ブームが到来すると輸送を担当する集団には膨大な利益がもたらされた。

今回、船形埴輪を出土した遺跡を眺めてきたが、古代の海洋族と言われてきた海部氏、安曇氏など以外の地元の豪族が地の利を生かして活躍しており、九州・大和の政治の各組みを越えた海運ネットワークの構築がされた様子が覗かれる。

(2) 難波の湊の繁栄

『日本書紀』に拠ると、5世紀の仁徳期に「難波高津宮」が置かれると政治の中心地となり、仁徳天皇陵以外に猪甘津大橋、難波の掘江、茨田堤^{まんだつみ}の構築と屯倉の設置など大規模工事が続出した。当時、未だ租税制度が確立していなかったため、これらの費用を国費で賄ったとは考え難く、この地を支配している豪族が費用の大半を負担したと考えられる。仁徳天皇陵の構築だけでも最大2千人で16年の歳月を必要としたとする試算もあり、全体ではその数倍の規模の工事が継続して行われた。この事業を可能にしたのは海運による利益であり、秦氏の技術を使った工事により砂洲と沼地が開拓され、日本列島の貿易、商工業の中心地としての地位を得ていったと思われる。この開拓に伴ない、多くの渡来人が移住して各種の工房が作られた。この地の繁栄の様子は難波の掘江に作られた倉庫群が物語っており、大阪大学の都出比呂志名誉教授の試算によると5千町歩の米を貯蔵できる規模であった。



< 5世紀の河内平野（筆者編） >

7世紀中頃、孝徳期に再び難波が政治の中心地となり、難波長柄豊碕宮（前期難波宮）、四天王寺の建設、難波大通り（幅18m）の整備が進められた。その繁栄の様は前期難波宮の規模が、240×550mに及ぶことや、宝物を保存したと思われる「並び倉」が正倉院（33m）に比べて48mもあることから覗われる。朝鮮半島からは多数の外交使節が訪れ、「難波館（なにわのむろつみ）」などの迎賓館があった。しかし、朝鮮半島との緊張が高まる中、孝徳天皇の崩御（654年）に伴い飛鳥に京を移すことになり、再び使われるのは天武期の副都制（683年）になってからである。その後686年には難波宮が全焼し、聖武天皇期に一時的に平城京の副都とされた以外に政治の中心地としての役割は終えたが、湊を中心とした商業都市として役割は保たれ現在に至っている。

『日本書紀』年表2について

瀬戸市 林 伸禧

はじめに

「東海の古代」138号（平成24年2月）で、横書きの『日本書紀』年表2（神武紀～応神紀）を発表したが、本来は縦書きで作成すべきと思い、現在縦書きで編集している。その際に新たな事項が判明したので報告する。

1 仲哀天皇の出自

仲哀天皇は、即位前紀によれば、日本武尊と皇后のふたぢのいりびめ兩道入姫命（垂仁天皇皇女）との間に生まれた御子とされている。このことから、日本武尊は天皇と思われるが、そのように記述されていない。

（1）仲哀即位前紀における出自の記述

足仲彦天皇 日本武尊第二子也

母皇后曰「兩道入姫命 活目入彦五十狹茅天皇之女、也

稚足彦天皇四十八年立爲太子〔時年卅一〕

元年春正月庚寅朔庚子 太子即天皇位

秋九月丙戌朔 尊母皇后曰「皇太后、

（日本古典文学全集『日本書紀』① 400頁。〔〕：細字）

(2) 仲哀即位前紀の疑問点

皇后の兩道入姫命（垂仁天皇皇女）は、垂仁紀での系譜に記述がない。皇后となる姫であるのに、系譜に記述されていないのは不審である。

なお、『古事記』垂仁記では、次のとおり記述されており、垂仁天皇の御子であることは明確である。

又 娶 其大國之淵之女弟 苜羽田刀辨 生御子 石衝別王
次 石衝毘賣命 亦名布多遲能伊理毘賣命〔二柱〕

……
次 ^{ふたりのいりびめ}布多遲能伊理毘賣命者〔倭建命之后〕

（日本古典文学全集『古事記』194・195頁。〔〕：細字）

詳しくは、「別紙2『古事記』による天皇系譜（垂仁天皇～仲哀天皇）」を参照されたい。

(3) 日本武尊の疑問点

景行四十年条に、日本武尊が亡くなられた時の記述は、次のとおり天皇と同様の記述がされている。

なお、是歳（景行四十年）条に小碓王（日本武尊）が景行四十三年に亡くなられたと推測される記事がある。

- ① 天皇と同様に、亡くなられたことを「崩」と記述されている。
- ② 天皇と同様に、墓を「陵」として造られている。

是歳……既而崩于能褒野 時年卅

天皇聞之 寢不安席 食不甘味 晝夜喉咽 泣悲擗擗 因以 大歎之曰

「我子小碓王 昔熊襲叛之日 …… 是以 朝夕進退 佇待還日 何禍兮 何罪兮 不意之間 倏亡我子 自今以後 與誰人之 經綸鴻業耶」

即詔羣卿 命百寮 仍葬於伊勢國能褒野陵

時 日本武尊化白鳥 從陵出之 指倭國而飛之 羣臣等 因以 開其棺槨而視之 明衣空留 而屍骨無之 於是 遣使者追尋白鳥 則停於倭琴彈原 仍於其處造陵焉

白鳥更飛至河内 留舊市邑 亦其處作陵

故 時人 號是三陵 曰「白鳥陵」

然遂高翔上天 徒葬衣冠 因欲録功名 即定武部也

是歳也 天皇踐祚四十三年焉

（日本古典文学全集『日本書紀』①384頁・386頁）

以上により、仲哀天皇の父「日本武尊」は天皇であるが、なぜ、天皇紀として記述されていないのか、不審である。

2 仲哀紀の系譜

(1) 大中姫の出自

仲哀紀で、仲哀天皇は大中姫との間に二人の御子をもうけたと記述されているが、「叔父彦人大兄」の出自は不明である。

娶 叔父彦人大兄之女 大中姫 爲妃 生 麿坂皇子・忍熊皇子

(日本古典文学全集『日本書紀』① 402頁)

『古事記』仲哀記では、大江王は景行天皇と迦具漏比賣命との御子である。

天皇 娶 大江王之女 ^{おおなかつひめ} 大中津比賣命 生御子 香坂王・忍熊王

大帶日子天皇 娶 此迦具漏比賣命 生子 大江王

此王 娶 淡海之柴野入杵之女 柴野比賣 生子 迦具漏比賣命

(以上、日本古典文学全集『古事記』240・238頁)

迦具漏比賣命は、小碓命（景行天皇の子）の孫である「須賣伊呂大中日子王」の御子、すなわち小碓命の曾孫（景行天皇の玄孫）でありながら、景行天皇（大帶日子天皇）に嫁いでいる。そして生まれた御子大江王は、景行天皇の来孫でもある。

実際、このようなことが可能か、疑問である。

(2) 記事の重複

須賣伊呂大中日子王は、景行天皇と倭建命の系譜に重複して記述されている。

表1 須賣伊呂大中日子王の系譜

区分	系譜記事	倭建命との関係	
景行天皇系譜	天皇 娶 倭建命之曾孫 <u>名須賣伊呂大中日子王之女</u> 訶具漏比賣 生御子 大枝王	かぐろうひめ 訶具漏比賣 (曾孫)	おおえ 大枝王 (玄孫)
倭建命系譜	倭建命 娶 其入海 弟橘比賣命 生御子 若建王 (※子) 若建王 娶 飯野眞黒比賣 生子 <u>須賣伊呂大中日子王</u> (※孫) 此王 娶 淡海之柴野入杵之女 柴野比賣 生子 迦具漏比賣命 大帶日子天皇 娶 此迦具漏比賣命 生子 大江王	かぐろうひめ 迦具漏比賣命 (曾孫)	おおえ 大江王 (玄孫)

※1 日本古典文学全集『古事記』214・236・238頁

2 名前の一字は異なるが、読み方は同一と判断される。

3 大枝（大江）王は、景行天皇の子であると共に、倭建命の玄孫（景行天皇の来孫）でもある。

(3) 判然としない点

景行天皇から仲哀天皇の系譜については、判然としない点が多々ある。

『古事記』の系譜においては、倭建命の系譜の次に景行天皇の系譜とした方が理解し易いと思われる。

3 景行天皇から仲哀天皇までの誕生年

(1) 誕生年

各天皇には立太子時の年令と崩御時の年令が記述されており、それに基づいて誕生年を算出したのが「表2 天皇の誕生年算出表」である。

表 2

天皇の誕生年算出表

天皇名等	立太子年			崩御年			誕生年			
	年令	年号年数	西暦	年令	年号年数	西暦	立太子年から算定した年号年数		崩御年から算定した年号年数	
景行天皇	21	垂仁37年	8	106	景行60年	130	垂仁16年	前13	垂仁53年	24
日本武尊	16	景行27年	97	30	景行40年	110	景行11年	81	景行10年	80
	—	—	—	—	景行43年	113	—	—	景行13年	83
成務天皇	24	景行46年	116	107	成務60年	190	景行22年	92	景行13年	83
仲哀天皇	31	成務48年	178	52	仲哀 9年	200	成務17年	147	成務18年	148

(2) 誕生年の考察

すべて、誕生年が異なり、立太子年と崩御年には整合がとれていない。その理由は不明であるが、仲哀天皇の1年のズレは次の理由と思われる。

- ① 成務天皇崩御年（成務六十年、190年）と仲哀即位年（仲哀元年、192年）との間に暦法上1年の空白年が存在する。
- ② 空白年を無視すると、誕生年は合致する。すなわち、『日本書紀』編纂者は空白年を承知していなかったことである。
- ③ 前項から、空白年の1年を勘案すると、立太子の年令三十一歳からは崩御年令は五十三歳である。同様に、崩御年令五十二歳からは立太子年令は三十歳である。
- ④ 年令として、立太子年令・崩御年のいずれが正しいか不明である。

なお、詳細は「別紙2 天皇等年令年表」を参照されたい。

4 仲哀天皇と日本武尊との関係

- ① 「表2 天皇の誕生年算出表」から日本武尊が亡くなられた時には、仲哀天皇は誕生していない。不審である。
- ② 仲哀即位前紀では、仲哀天皇が二十歳になる前に父の日本武尊が亡くなられたと述べているが、仲哀天皇はまだ誕生していない。
 冬十一月乙酉朔 詔群臣曰
 「朕未逮于弱冠 而父王既崩之 乃神靈化白鳥而上天 仰望之情 一日勿息 是以冀獲白鳥 養之於陵城之池 因以覩其鳥欲慰顧情」
 （日本古典文学全集『日本書紀』①400・402頁）
- ③ 注釈書においても、日本武尊の死亡時期と仲哀天皇の誕生に矛盾があると述べているのみである。
 この矛盾については、今後の検討課題である。

高市皇子即位説

名古屋市 石田泉城

日頃、当会の磯田和則氏が唱えている「高市皇子即位説」について、私も賛同しているところです。そこで、次に高市皇子即位の根拠を整理し、高市皇子即位の可能性が高いことを示します。

1 長屋親王の木簡

平城京の近くの長屋王の邸宅跡と考えられる場所から「**長屋親王宮鮑大贄十編**」(長屋親王の宮へアワビの献上品を十編)と書かれた木簡を始め「長屋親王」の文字が確認できる複数の木簡が出土しています。親王とは皇位継承権を持つ男子の皇族ですから、「長屋親王」と呼ばれたのであれば、天皇の直系の皇子であるということになります。

しかし、書紀の記述の上では長屋王は、天武天皇の長男の高市皇子の子であって、長屋王は天皇の子ではないので、「長屋親王」とは呼ばれるはずがないことから、通説では、「長屋親王」は間違いで「長屋王」を正しいとするか、長屋王は外部に内緒で「長屋親王」と称していたか若しくは「親王」と呼ばれるほどに権勢があったと解釈されています。

養老四年(720年)に藤原不比等が亡くなると、長屋王は養老五年(721年)に右大臣になり最高の実力者となっていますので、権勢があったことには間違いありませんが、権勢があったから親王とみなされても構わないという解釈は正しくないように思います。親王は、実権の度合いを表すものではなく身分を示すものだからです。

木簡の記述は、記紀の記述よりも、当時のそのものの状況を表した証拠であって第一次史料ですから、後の時代に歴史を編纂した記紀よりも重視されるべきです。したがって、記紀の記述の方を正しいとする通説の考え方にはやや無理があります。

木簡の記載が正しいとすると、素直に解釈すれば、長屋親王の父親である高市皇子が天皇であったので、その子の長屋王が親王と称されていたということになるのではないのでしょうか。

2 高市皇子の記述順

天武紀によれば、高市皇子は、天武天皇の皇子の中で大津皇子や草壁皇子よりも序列が高い筆頭の天皇候補です。ですから天皇になっても全く違和感がありません。

天武元年の記事では、高市皇子を筆頭として、次に大津皇子の順序で記されています。壬申の乱で活躍したのは高市皇子だけですから、当然と言っても過言ではありません。

(元年六月甲申) 惠尺、馳之往於近江、喚高市皇子・大津皇子逢於伊勢

しかし、天武八年のいわゆる「吉野の盟約」で草壁皇子を次期天皇候補としたことから、これ以降、草壁皇子が筆頭になり、次いで大津皇子、高市皇子の順になります。高市天皇は、草壁皇子や大津皇子に次いだ順になってしまいます。

- (八年) 五月⁵庚辰朔甲申、幸于吉野宮。乙酉、天皇、詔皇后及草壁皇子尊・大津皇子・高市皇子・河嶋皇子・忍壁皇子・芝基皇子曰
- (九年秋七月) 癸巳、飛鳥寺弘聰僧終、遣大津皇子・高市皇子而弔之。
- (朱鳥元年八月) 遣草壁皇子尊・高市皇子而訊病。
- (十四年春正月) 是日、草壁皇子尊授淨廣壹位、大津皇子授淨大貳位、高市皇子授淨廣貳位、川嶋皇子・忍壁皇子授淨大參位

しかしながら、「吉野の盟約」で草壁皇子が天皇の後継者と考えられていたにもかかわらず、天武十二年には「大津皇子、始聴朝政」と記され大津皇子が実質的に天武の後継者に指名されたと考えらる記事があり、草壁から大津に皇位継承の順位が移ったように思われます。ただ、大津皇子は、天武崩御の朱鳥元年に謀反の罪で殺害されてしまいます。この事件は、逮捕された共謀者のほとんどが赦免になっていることから、ここには何らかの強い意志が働いているように思われます。大津に傾いた権勢を草壁に取り戻して草壁の皇位継承を確実にするために、大津を抹殺した持統の陰謀と考えられます。

ただ、大津が亡くなったところで草壁皇子が天皇になるはずですが、草壁皇子は皇太子となっているのみで、持統称制が始まります。となると、持統は草壁も天皇にする気がなかったのではないかと疑われますが、そうこうするうちに持統三年には草壁皇太子が死去します。

さあ、大津も草壁もいなくなったところで、高市皇子が天皇になってもおかしくない状況が生まれます。しかし、書紀は、持統四年に持統即位、高市皇子は太政大臣就任と記します。持統は何としても軽皇子（文武天皇）の皇位継承が妥当である状況を書紀の記述の中に組み込もうとしたのではないかと思います。書紀では、高市皇子は太政大臣と記されていますが、誰の目からみても持統即位が異常なことは明らかでしょう。

皇位は原則として皇統に属する男系で皇族の身分を有する者が継承してきており、第1位は天皇の実子すなわち高市皇子であり、皇后の皇位継承順位は、天皇の孫よりも後です。となると、書紀の記事のように高市が天皇に即位せず、持統即位となるのは異例中の異例です。持統即位の記事は、軽皇子の次期天皇即位が正当であることを印象づけるために仕組まれたのであろうと思われます。

3 のちのみこのみこと 後皇子尊

高市が天皇になったことをうかがわせる記事があります。

「皇子尊」と呼ばれた草壁皇子に対して、持統十年に亡くなった高市皇子は「後皇子尊」と呼ばれています。すなわち、高市は間違いなく天皇の後継者であったのです。しかし、高市の即位を記したならば、文武の正統性が崩れてしまい、当然、高市の子の長屋王が、次の最も優位な皇位継承資格を持つこととなります。

したがって、書紀は高市皇子は即位しなかったことにして、持統天皇の側近の太政大臣として記したのではないかと考えます。

4 『懐風藻』の記事

高市天皇説を支持する根拠が『懐風藻』の記事にあります。

葛野王は「^{かどの}高市皇子薨じて後、皇太后、王公卿士を禁中に引きて、日嗣を立てんことを謀る。」と軽皇子（文武）による皇位継承を主張したとあります。高市皇子が死去したのは持統十年であり、このとき書紀において、持統は天皇であって皇太后（先代の天皇の皇后、天皇の母で皇后であった者）ではありません。しかし、『懐風藻』の記事を信ずれば、持統は皇太后のままで天皇に即位していなかったことがうかがわれます。

また、太政大臣の死去の際に「日嗣を立てる」としますが、「日嗣」とは、天皇の位を敬っている語句です。書記の上では、既に持統が天皇であるはずですので太政大臣の高市が死んでも「日嗣を立てる」必要はありません。亡くなった高市が天皇であったからこそ「日嗣を立てる」必要が生じたと言わざるを得ないでしょう。この記事は、まさしく、高市は天皇であったことを示しているように思います。

倭の五王 - 『宋書』の倭國 - 関連 Yahoo!ニュース・西日本新聞の記事

名古屋市 石田泉城

「卑弥呼の墓では」巨大な前方後円墳？謎の丘陵

日本最大に迫る全長450メートル

[福岡県]2018年03月20日 06時00分

赤村に巨大な前方後円墳。こんな話が、地元住民の間やインターネット上でささやかれ始めている。地元の古代史研究グループによると、現場の航空写真から鍵穴型丘陵の全長は約450メートル。日本最大の前方後円墳「大山（だいせん）古墳」（堺市）の墳丘長に迫る大きさとあって、古代史ファンからは「卑弥呼の墓では？」といった期待の声も聞かれる。

丘陵は同村の西端、内田小柳地区の雑木と竹に覆われた民有地で、東側を平成筑豊鉄道と県道418号が南北に走る。数年前から丘陵の形に着目してきた田川地域住民などで行く「豊の国古代史研究会」の調査では、後円部に当たる部分は直径約150メートル。魏志倭人伝にある邪馬台国女王卑弥呼の墓の直径「径百余歩」とほぼ一致するという。

また、丘陵沿いの住民によると、東側にある後円部と前方部のくびれのような場所では、タケノコ掘り中に土器片が多数発見。周濠（しゅうごう）の部分に当たる丘陵西側脇には、以前から湿地が広がっていたという。

現在まで発掘調査はなされておらず、真偽は謎のまま。田川地域の自治体の文化財担当者らは一様に、丘陵を「自然の地形」として、前方後円墳との見方を明確に否定している。

＝2018/03/20付 西日本新聞朝刊＝

「東海の古代」209号（2018年1月）の「倭の五王」-『宋書』の倭国-その9」において紹介した巨大方円墳の形状について、左の新聞記事が掲載され、yahoo! ニュースで流れました。当会報誌や私のブログがニュースの火付け役になったようです。

地元の赤村文化財調査委員会では、福岡県田川郡赤村内田小柳地内に朱色を施した横穴式石室があったことを1976年に報告し小柳古墳と名付けたものの、前方後円墳とは認めていません。もし、これが巨大古墳であったとすれば日本の古代史を大きく変えることにつながりますので、私はしっかり調査すべきと考えます。

ところで、関心を惹かせるためにたいへんセンセーショナルなタイトルになっていますが、記事の中に気になる記述があったので、ひとこと書き留めておきます。

卑弥呼の墓についてです。『魏志』倭人伝には次のとおり記されています。

卑彌呼以死，大作冢，徑百餘步，狗葬者奴婢百餘人。

卑彌呼、以て死す。大いに冢を作ること、徑百余歩。徇葬する者、奴婢百余人。

（読み下しは筆者による）

ここでは塚の大きさが「徑」と記され、これは直径のことを表していると理解されますから、円墳が常識的と考えられます。この記事以外には卑弥呼の墓についての情報がないのですから、卑弥呼の墓を前方後円墳と決めつけるような通説に従ってはならないと思います。

前回の例会の内容

■「白村江の戦い」の考察

一宮市 竹嶋正雄

『旧唐書』百濟伝と『日本書紀』の「白村江の戦い」の記事を比較して、その年を考察した。龍朔二年七月の内容は、龍朔二年七月の一時に起きた事でないとは分析し「白村江の戦い」は663年の出来事であると結論付けた。

■近江地方の製鉄と東海

一宮市 畑田寿一

近江地方の製鉄は、磁鉄鉱を原料として6世紀頃に湖北地方で始まり、国家の近代化と唐との戦争に備えた。その後各地に製鉄技術は広がっていったと示した。

■空白の推古三十年

名古屋市 石田泉城

書紀編者は推古三十年の記事を先送りにし干支のズレを生じさせたままにしたのは、上宮法皇が亡くなった推古三十年に注目させるためではなかったのかと疑問を投げかけた。

2018年度会員の募集

- 1 年会費 5,000円 (会報誌等送料込み)
- 2 納入期限 2018年4月8日(日)
- 3 振込先
・金融機関：ゆうちょ銀行

募集中!

- ・名称：古田史学の会・東海
- ・店名：二一八
- ・店番：218
- ・口座：普通 1299395

4 問い合わせ

- ・メール furuta_tokai@yahoo.co.jp
- ・電話&FAX 0561-82-2140

例会の予定など

■ 例会の予定

- 1 日時 4月8日(日) 13:30~17:00
- 2 場所 名古屋市市政資料館 第1集会室
名古屋市東区白壁1-3、TEL052-953-0051
- 3 参加料 500円 (会員は不要)
- 4 交通機関
(1) 地下鉄名城線「市役所」、東徒歩8分
(2) 名鉄瀬戸線「東大手」、南徒歩5分
(3) 市バス「市政資料館南」、北徒歩5分
(4) 市バス「清水口」、南西徒歩8分
(5) 市バス「市役所」、東徒歩8分
- 5 駐車場 市政資料館：12台+α収容(無料)

■ 来月以降の例会 5月6日、6月3日

■ 投稿締切り日 4月25日(水) 厳守

■ 投稿先 (編集担当：石田)

furutashigaku_tokai@yahoo.co.jp

古田武彦先生とその学問に興味のある方などなたの参加も歓迎します。また参加に際し事前連絡不要、遅刻・早退もかまいません。例会で発表する場合には資料を25部用意ください。
